別紙２

論文審査結果の要旨

論文提出者氏名　小堀　修

完全主義とは、何でも完ぺきにやりたいとか、自分に対して完璧を求める性格特性をさしている。完全主義は、高い学業成績や目標達成に結びつくといった適応的な性質をもつ一方で、小さなミスや失敗にこだわり自己批判する性質を併せ持ち、うつ病や不安障害などの不適応を導くことも知られている。こうした完全主義の二面性について実証的に調べた研究はほとんどない。本研究は､完全主義の認知モデルを作成し､それがどのように心理的適応と不適応と結びつくのか、そのメカニズムを検討したものである。心理療法の場面では、完全主義的パーソナリティを持つ人は多く見られ、完全主義について調べることは、臨床的に大きな意義がある。

本論文は５部から構成される。第１部では先行研究を精査して「完全主義の認知モデル」を作成し、第２部（研究１）では、完全主義と Cloninger の気質モデルとの関係を調べた。第３部（研究２・研究３）では、新たな完全主義認知尺度を作成し、その妥当性を調べた。第４部（研究４～６）では、前述の「完全主義の認知モデル」の妥当性について、質問紙法と実験法を用いて検討した。最後に、本研究から得られた知見について、治療的示唆を考察した。

第１部で提出された「完全主義の認知モデル」とは、完全主義パーソナリティが、一方では、接近目標がある場合にはポジティブな認知をもたらし、他方では、回避目標がある場合にはネガティブな認知をもたらすという仮説である。つまり、完全主義のポジティブな認知過程は、(1) 接近目標 (成功、他者の賞賛、秀逸などの「報酬」を追求する目標) のある状況では、 (2) 自己志向的完全主義から完全主義のポジティブな認知が生じ、 (3) この認知が心理的適応と結びつく。一方、完全主義のネガティブな認知過程は、 (1) 回避目標 (失敗、拒絶、平凡などの「罰」を回避する目標) のある状況では、(2) 自己志向的完全主義より完全主義のネガティブな認知が生じ、(3) この認知が心理的不適応と結びつくというものである。

研究１では、完全主義パーソナリティが、もともと不適応的なパーソナリティであるのかを検討することであった。そのため、完全主義と既存のパーソナリティモデルとの関係を質問紙調査で検討した。大学生 428 名を対象に、自己志向的完全主義と Cloninger の気質理論を測定する尺度である Temperament and Character Inventory との関連を質問紙調査で検討した。その結果、自己志向的完全主義は、低・新規性追求と高・固執という気質パタンと結びつくが、さまざまな精神病理の脆弱性となる損害回避という気質とは結びつかなかった。

研究２では、完全主義の認知を測定する尺度を開発した。大学生 478 名を対象にした調査研究を実施し、完全主義の認知を測定する質問紙を作成した。その結果、(1) 高目標設置、(2) ミスへのとらわれ、(3) 完全性追求の 3 つの下位尺度から構成される「多次元完全主義認知尺度」が完成した。

研究３では、大学生 198 名を対象にした調査を行い、多次元完全主義尺度の構成概念妥当性を確認した。

研究４では、自己志向的完全主義から完全主義の認知が生じ、この認知がポジティブ感情、ネガティブ感情と結びつく認知過程を検討した。大学生 358 名を対象とした調査を行い、共分散構造分析の結果、(1) 自己志向的完全主義から高目標設置の認知が生じ、この認知がポジティブ感情と結びつくことが明らかとなった。しかしながら、自己志向的完全主義とポジティブ感情の間に直接的な相関は見出されなかった。一方で、(2) 自己志向的完全主義はミスへのとらわれを経由してネガティブ感情と結びつくことが明らかとなった。

研究５では、自己志向的完全主義、接近目標と回避目標、完全主義の認知、ポジティブ感情とネガティブ感情との関係を検討した。大学生 60 名を対象に、達成課題を用いた実験を行った。その結果、(1) 接近目標があるとき、自己志向的完全主義から高目標設置の認知が生じ、この認知がポジティブ感情と結びつくことが明らかとなった。一方で、(2) 自己志向的完全主義はミスへのとらわれを経由してネガティブ感情を導いたりポジティブ感情を減じること、またこの関係は回避目標があるときに増強されることが明らかとなった。

研究６では、自己志向的完全主義からネガティブな完全主義の認知が生じ、この認知が過度の情報収集行動と結びつく認知過程を検討した。大学生 60 名を対象に確率推論課題を行った結果、自己志向的完全主義が完全性追求の認知を経由し、過度の情報収集行動と結びつくことが明らかとなった。

本研究においては、次の諸点が高く評価された。

１）数多くの完全主義の定義と概念を整理し、完全主義パーソナリティが心理的適応と不適応とどのように結びつくかを包括的説明する認知モデルを作成したこと。

２）完全主義について、包括的に測定できる尺度を作成し、その信頼性と妥当性を明確にするなど、質問紙データの信頼性を高めるために細心の注意を払い、多数の調査データを積み重ねて、実証的な議論を組み立てていること。

３）先行研究のような横断調査ではなく、縦断調査や実験法を取り入れることによって、因果関係に踏みこみ、先行研究の限界を越えようと試みたこと。これによって、完全主義の適応的側面と不適応的側面の二面性について、因果にふみこんで記述することができたこと。

４）こうした実証研究を積み上げることによって、完全主義と結びつく精神疾患に対する認知行動療法に役立つ確実な情報を提供したこと。

なお、以上の研究の実施にあたって、倫理的な配慮は十分になされていると確認された。

これらの成果により、本論文は博士 (学術) の学位に値するものであると、審査員全員が判定した。なお、研究 1 は Personality and Individual Differences 誌上に、研究 2 と研究 3 は日本パーソナリティ研究誌上に、研究 4 と研究 5 は Cognitive Therapy and Research 誌上に公表済みである。